上田秋成

上田秋成

佐藤春夫

桃源社・刊

上田秋成

昭和三十九年八月十五日　印刷
昭和三十九年八月二十日　発行

定価　八百五拾円

著作者　佐藤春夫
発行人　矢貴東司
印刷者　奥村印刷株式会社

発行所　株式会社　桃源社
東京都中央区日本橋蛎殻町一ノ一二
電話　（六七一）四〇〇一、二番

1964 ©

まえがき

一九六三年の夏から秋にかけて、「佐藤春夫文芸論集」を編んだとき、関係文献を調べてみると、上田秋成について佐藤春夫先生の論じ、語り、訳し、評したものが意外に多いのを知った。精読してみると、どれも面白い。佐藤先生にその旨を申し上げると、それでは機会があればまとめましょうと云われて、それらの散逸した諸稿を取り集めるように、牛山百合子嬢に依頼された。同嬢は、先生の作品を敬愛して、雑誌その他定期刊行物に出たままになっている先生の逸文を、年来心がけて蒐集している方だからである。十一月の末には、ひとまず取り集めた十二篇の資料を原型のままのものと複写版の形とで、牛山嬢が先生にお渡しすると、いまみる形の配列に指定されて、すぐ印刷にまわされたのである。その十二篇を、発表の年次と掲載誌名とについて表示すると、次の如くになるだろう。

配列順	表題	年月	誌名	巻号
1	上田秋成	昭和13・1・2	文芸春秋	16―1・2
2	上田秋成を語る	〃 9・8	新潮	31―8
3	再び上田秋成を語る	〃 9・10	早稲田文学	1―5
4	あさましや漫筆	大正13・11	世紀	1―2
5	雨月物語清涼抄	昭和13・8	中央公論	53―8
6	「菊花の約」を讀む	〃 21	?	
7	菊花の約	〃 20・4	『日本文芸の道』	
8	蛇性の婬	〃 9・9	婦人公論	19―9
9	樊噲 (附)水滸傳雑記	〃 28・4・5 10	文芸日本 心	6―4・5 復刊9
10	邪神	〃 26・5	三田文学	26―1
11	ますらを物語	〃 13・1	新日本	1―1
12	知性の作家・上田秋成	〃 34・6	週刊読書人	

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

このうち、不明の6は、佐藤先生がたしか「新潮」に載せたように思うと云われるので、調べてみたが、あたりえた範囲では、見つからなかった。残念だが心あたりのある方に御教示をお願いする外に仕方がない。

一九六四年五月六日、佐藤先生は急逝された。そのためにこれらの十二章は、先生の校閲を心ゆくまで得られなかった。かえすがえすも口惜しいことである。それで、配列は先生の指定されたものにちがいないが、じつは第二章第三章の中に「癖癖談」と「膽大小心録」とに関し、十枚ほど書き足したいと、二月ごろ牛山嬢にはお話しになった。その先生の加筆が得られなかったのは、もっと取り返しのつかない口惜しいことである。恐らく御在世であるならば、第一章の秋成傳の史実に関しても、もし訂正すべきことがあるならば、必ず訂正せられたにちがいない。これまた取り返しのつかぬ不幸だと嘆くのみである。

本文については、斯学の専門家重友博士に懇篤な解説の筆をとって頂くことが出来たのは、関係者

一同の心から喜びとするところである。加えてまえがきとして、不肖がこの書の成立の事情を略記させて頂いたのは、先生の御遺族の御言葉による。

一九六四年六月十五日

島田謹二

目次

まえがき　島田謹二　一

上田秋成

上田秋成を語る　三八
再び上田秋成を語る　六七
あさましや漫筆　八三
雨月物語清涼抄　九三
「菊花の約」を讀む　一二五

菊花の約　一三八
蛇性の婬　一四五
樊噲　一七六
水滸傳雜記　二三三
邪神　二三八

ますらを物語　二五四
知性の作家・上田秋成　二六九
あとがき　重友毅

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

上田秋成

一

上田秋成の生涯に關しては全然判らない部分も無論無いではないが、大たいからは日本の文學者としては先づよく判つてゐる方の側であらう。それにはそれ相應の理由があるが、先づ比較的近世の人で、それも學問の勃興した明治のみ世に接近してゐるためといふ事が考へられる。また秋成は傑出した文學者といふ以外に煎茶の茶人としても世に重んぜられたから、斷翰零墨がその道の人に珍重され保存されてゐるものが多かつたのと、また秋成は相當に自我の強い性格で封建時代の人としては文中に多く自己を語つてゐる點などが考へられる。ここで自我の強いといふのは秋成が膽大小心録で才能のあだ

名とも呼んだ「私」といふものと似てゐるかとも思ふが、近代的な自意識とでも説明してよからう。さうしてこれが秋成の強い個性的な文學の基礎になつてゐるものである。この自意識の強さといふ點ではわが文學史上――現代の部は暫く別として――古來、秋成と一茶とが兩大關ではないだらうか。兩人は殆んど同時代といふべきであらうが、それでも秋成の方が幾分早いとなると、日本の近代人はこの邊からはじまると見ても當らぬ事はあるまい。一茶の自意識と秋成のそれとを對比して見るのも多少の興味はあらうが今は深入りしない。それよりも明るいのと暗いのとは反對ながらともに浪曼的な色彩の多い蕪村と秋成とが同時代で、それも西歐の文藝に同じ傾向が行はれたのと時代を同じくしてゐるのも偶然ではあるまい。古典主義に對する個性的反撥が世界の一風潮になつて東海の孤島まで無線電波風に影響したのではなかつたか。それにしても蕪村の春風駘蕩たる詩と名も秋成の暗鬱鬼氣を帶びた文學が時と所とを同じくして生れてゐるといふのは所詮作者の氣質の相違である。

秋成が如何にして自我に目覺めたか、どうして陰氣な浪曼家になつたかを知るために

はその爲人と生涯とを知れば自づとうなづくところが多い。境涯が性格を作り更に爲人が生涯を展開してゐるこの因果律に從つてその生涯と爲人とを同時に取扱つて見る。

秋成傳の不明な個所などの詮義はもともと史家でない自分の任ではないから、偏に後考を待つばかりである。その出生に關し或はその代表的神品、春雨物語の執筆年代の不明などに就て拙文は結局何一つ附加することの出來ないのははじめから自分でよく知つてゐる。讀者も豫めこれを了承して置いて頂きたい。自分の記事は既に諸家が十分に調べ盡して置かれたところを辿つて、これを一般讀者のために手ごろの要領に纒めて大過なく、その上に多少の趣味があつたら筆者の望外とするところである。即ちこの一文は專ら紫影藤井博士、岩橋小彌太、饗庭篁村等諸家、就中、藤井博士に負ふところのものである。それも負ふところが多いといふ位ではない。博士によつてはじめて出來たと言はなければならない事を明記し、鳴謝する。

二

秋成傳の中、最も疑問になる彼の出生に關しては從來さまざまな臆説が行はれて來た。彼を崇禪寺馬場の敵討で世に知られた生田傳八郎の忘れ形見とするの類である。この妄は夙に篁村が説き盡してゐる。まるで年代の合はない浮説なのである。別に秋成の母に就て、大坂曾根崎新地の妓樓花屋の娘で妓となつた者であるといふ説がある。これは全然の浮説でもないらしい。曾根崎娼家の女に生れたといふのは當時一般の風聞であつたものらしく秋成もこれに對しては只「三井は浪人者、白木屋は煙管屋、鴻池は小酒屋、小橋屋は古手屋、辰巳屋は炭屋なり、神代からつづいてある家のやうに誇ることおかし。老はにくんで茶屋のはてじやといふ、いや太鼓持の古なつたのじや、答へる、○○でさへなけりや御免の人交り、何にせよかし、只今は山の大將我一人、お相手はござらしやるまい。」とうはべは輕くあしらつて取合はない様子をなしてゐるが包みかねた心の傷痕は世上の取沙汰の全然打消し難いものありげなのを見せてゐるではないか。こ

の風聞は更に彼自身まで娼家の賤業を営んでゐたやうな説にまで發展してゐるが、これは秋成が養家の義理の姉の身の上と混同してゐるのではあるまいかといふ紫影博士の想像が當つてゐさうである。尙博士に憑ると『藤田某の書いた獻詠和歌帖の序文に「上田先生……本姓田中」とあるのは實母の姓であらうか』と斷じかけてから、『この文は秋成の死後天保二年の作であるから必ずしも信據すべきではない』といふ。秋成自身は自像を收めた箱の蓋に「無腸生浪華、客于京師十六年、無父不知其故、四歲母亦捨、有倖上田氏所養」と悲しい事を記し、また「老懶元來不遇薄命、實父生死不知」「實母只一面耳」といふ文字が晩年の尺牘に見えてゐるといふ。「……おもふに丹波の豪家の子浪花の遊廓に嫖かれ狂ひて秋成の母とかたらひしも、父母のいさめの嚴しきに隔られ手切とかいふ事になり、父子の緣を絶ちたるより、父にして父にならず、子にして子にはあらぬやうになりしにはあらぬか……」といふのが篁村の推測である。大方そんな事であらうか。しかし篁村が秋成の知り難い父を丹波の豪家の子と斷じたのは果して何に因つたものであらうか。もし、秋成が秋山記のなかにある「氷上の黒井といふこの聞ゆる鄕

はおやおほ父などの住みたまひし古さととかねて聞きしものから」とあるに原づいたのならば、これは養家の上田氏の事とその實父とを混同したのではなかつたかと、折角の事だけに少々心細い。

父母に關してはこのとほり明確でない。今日明確でないばかりではなく、當時も或は明確でなかつたのではあるまいか、尠くも父が明確でなかつたのではないかといふ事は想像される。

父無し子に生れた秋成が後年、人の需によつてとはいへ『旌孝記』をものして世上の孝子の見聞を記し集めた末に「噫我父に別れて四十餘年、母二人、さきなるはいときびはにて、面をだに見知り奉らず、後の母は今已に十四年のむかし人となし奉りぬ、いまそかりし時は……」と養家の祖父や父などを詳しく記してゐるのはなかなかにあはれである。これに一端を示した養家に關しては別にその家系や養父母の事など詳しいものがあるが實の父母に關しては多くを記さなかつた。

それにしてもその出生が享保十九年（甲寅）であつた事はその沒年文化六年からその

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com